ノート二

オーストリア三月革命について

——その研究史をふりかえって——

廣實源太郎

【要約】この論文はオーストリアの三月革命に関する研究発達史を整理、回想し、これから先の研究の指針にすることを主目的にしたものである。

その意味で、オーストリアにおけるものに限らず、ドイツ、イギリス、アメリカでの出版をも扱ったが、その際、かなり顕著な傾向を指摘することができる。全体的にいえば、第二次大戦のころまでの研究動向は政治史を中心とし、せいぜい諸民族の民族運動を追及したナショナリズムの歴史、そして、ハプスブルク帝国の民族的バランスを視点とした革命史の取扱いが圧倒的に多いことに気づく。このことは戦前の歴史学界の問題意識のあり方、また、研究レベルに関することでもあろうが、本来的に、ハプスブルク帝国の構成や市民革命としての性格のあいまいさに起因していると考えられ、少くとも、ウィーン革命の直接の動機を追っていけば、宮廷内の勢力争い、政権の交替といった、すぐれて政治的側面が強いことがいいうるのである。

この政治史偏重の傾向は、第二次大戦後のアメリカの関心によって、ある意味ではより一層促進されていった。戦後、世界政治の中にしめたアメリカの地位が、その観点からする関心を複合民族国家であるオーストリアによせ、その国家的な統合とバランスおよび分裂といった見地からする革命史研究を進めるのである。それは、そうした観点からする政治史の一種であった。

このことは、オーストリア三月革命研究における社会・経済史の弱さを逆に、物語っている。事実、民族地域の間における、極度にアンバランスな経済発達がみられ、ハプスブルク帝国全体の経済の把握は困難である。ただ、最近にいたって、革命を経済から説明する実証的研究がみられるようになってきている。将来においては、より綜合的な因果関係の説明が待たれるとともに、個別的、実証的な経済史研究の開拓が望まれるのである。

史林　五四巻五号　一九七一年九月

一　古典的研究——政治史の系譜——

市民革命の研究にあっては、一般に広義の経済史研究が重視せられる。このことは、市民革命と資本制の発達との対応関係から考えれば当然の結果であり、あとはただ、経済的要因を市民革命全体の中で、いかに考えるかといった、いわば位置づけの問題を考慮すれば足りるのである。現在、イギリス、アメリカ、フランス等の革命研究の主流が、むしろ社会経済史研究におかれているような感がするのも、その意味では理解できるし、おくればせながらも、ドイツ三月革命についていっても、その傾向は出てきている。①

それにもかかわらず、オーストリアの一八四八年三月革命の研究においては、遺憾ながら、経済史的研究は不十分である。わが国における研究が不足しているのみではなく、オーストリアそれ自身においても、十分な研究がなされていたとはいいがたい。②少くとも、イギリス革命やフランス革命等の研究の堀りさげに果した社会経済史の量と質とに比較すれば、この指摘が誤りであるとはいえないであろう。

例えば、オーストリア革命の古典的名著といわれる B. Maximilian, *Geschichte der Wiener Revolution im Jahre 1848*, Wien, 1898 にしたところで、すぐれて政治史的な叙述に終始しているのであるし、J. A. von Helfert, *Geschichte der österreichischen Revolution*, 2Bde., Wien 1907–09 も各地の民族主義運動を重視し、中欧の動向との関連において、オーストリアの革命を把握しようとつとめているし、われわれから見た場合に、豊富な史料を提供してくれる便利さはあっても、③経済に関する記述や史料の採用は、ほとんど皆無といってもよい。この傾向は H. Friedjung, *Österreich von 1848 bis 1860*, 2Bde., Stuttgart, 1904, や H. Schlitter, *Aus Österreichs Vormärz*, Wien, 1920 についてもいえるところであり、前者が主として、ドイツ問題に対するオーストリアの比重を意識して、革命とそれ以後のオーストリアをあつかい、後者が三月前期の国家意識の変化に力点をおいている以上、経済的要因への考察は末端におかれざるをえなかった。

第二次大戦後に出版されたものでは、まず E. Fischer, *Österreich 1848*, Wien, 1946, と R. Endres, *Revolution in Österreich 1848*, Wien, 1947 があげられる。ともに二〇〇ページ程度の小著であるが、戦前には見られなかった特長をそなえ、革命史を物語る態度を改め、意味づけと解釈を第一義としている。しかし、前者はマルクス主義の方法論をとり入れ、階級闘争の見地から革命を分析しながら、その咀嚼は不十分で、階級闘争が生ずるにい

たる、封建制ないし絶対主義から資本制への移行や矛盾の問題には、ほとんどふれていない。後者はその第二章を Wirtschaft u. Gesellschaft im Vormärz としてさき、全体の一五パーセントにあたる三〇ページをあて、その中を「農民の状態」、「工業、商業、交通」、「社会」の三節に分けているが、そこで述べられていることは、必ずしも、著書全体の主旨と関連づけられているのではなく、単に、三月前期の経済のあり方を述べたにとどまるといっても過言ではないし、何よりも、著者自身が語るように、[4] M. Bach の古典的名著*Geschichte der Wiener Revolution im Jahre 1848*, Wien, 1898 を意識しすぎ、それを現代的に註釈したような感じが強すぎた。

戦前に、ドイツで出版された研究書についていっても、政治史偏重、経済史の不在が指摘できる。もっとも古典的な V. Valentin, *Geschichte der deutschen Revolution 1848–1849*, 2Bde., Berlin, 1930 は豊富な史料を縦横に用いた輝かしい成果であり、現在にあっても、三月革命研究に欠かせぬ名著である。この書は、もちろん、ドイツ三月革命の全体像を画いているのであって、オーストリア三月革命の専門書ではないけれども、一八四八年当時のドイツの実情を反映して、かなり多くのスペースをオーストリアに割いている。一九一二年以来、約三〇年近くを三月革命の研究に捧げ、「わたしの目的は一八四八—四九年の民衆運動の歴史を書くこと」[5]とし、この目的に偉大な学問的課題と同時に、祖国的使命をも感じていた Valentin がとりあげたものは、公式的な革命史でもなければ、平担な政治史でもない。それにもかかわらず、人物描写に多くのページをさき——それはわれわれにとって貴重ではあるが——結局はフランクフルト国民議会を中心とした「統一と自由」運動の失敗に力点がおかれている。三月革命をシュタインとビスマルクの中間点に位置づけ、シュタイン的理念とビスマルク的理念の抗争としてとらえ、[6] スペインのフェルペ二世が、フランスのルイ一四世が、イギリスのエリザベス女王が、そしてオーストリアのマリア・テレジアさえもがなしとげた国家、文化、宗教上の統一をドイツについて期待し、ついにそれを生みだしえなかったものが三月革命であるとする著者の立場は、明らかに、ドイツ統一に観点が集約されている。[7] この立場からオーストリアの革命を観察すれば、おのずから、一つの方向が浮び上がらざるをえないのであり、経済的要因は国力をはかる経済事情の説明に終わらざるをえなくなってきた。

これに比べて、R. Stadelmann の著書は、戦前とは異なった方法論が採用されている。それは、著名にもあるように、革命の社会学的説明である。著者は、革命が発生する基本条件として、社会が社会自身への愛着を失い heimatlos、その時点で支配的であ

る社会組織を破壊させようとするような、新たな中間層 Zwischenschicht が形成せられることをあげている。[8] この方法論によれば、いうまでもなく、社会の雰囲気が問題になってくるわけで、その意味から著者は、社会と政治の方向を決定的にする心理を重要視した。その時代の活きた人間の利害打算や目に見えない伝統的思考の集合が大衆心理、社会心理となって働くとする。この見地に立って、農民を説明し、ドイツでは、プロレタリアートでさえも、社会理念において、半封建的な裏面を脱することができなかったと述べ、革命への、社会心理的未準備が、三月革命を失敗させる、大きな理由であったとしているようである。

「反革命という言葉を使う場合、多少とも暴力を用い、旧制度を復活させようとする外見の現象と世論の変節という内部現象とを、明確に区別しておかねばならぬ。革命現象に対する大衆の変化は複雑である。倦怠、麻痺、大望が興奮した感情偏逸と、つぎつぎに新しいものを求めようとする欲望とを重なり合わせる[9]」といっている Stadelmann は、例えば、ウィーンの反革命の成功をつぎのように、「心理的」に説明している。すなわち、彼は、ニコライ一世がハンガリアに進駐して革命を干渉したことやチェッヒ民族の動き等を過大に評価することを避け、ハプスブルク家に象徴される皇帝理念や王朝的・軍事的国家思想への信頼が、一八四八年当時、国民の気持の中で、なお支配的であったことに主因を求めている。[10] 三月段階においては、革命に熱中し、ドイツ統一を夢みたオーストリア人であったが、やがて、大半のものは、フランクフルトの国民議会よりもハプスブルク帝国をあらわす黒と金の旗に愛着をもっていたのに気づく。著者は社会を大衆心理から説明している人にふさわしく、一〇月以後になってくると、黒・金・赤の革命旗と黒・金のハプスブルク旗とに対するひとびとの心理を例としてあげ、黒・金の旗が、結局は「国家の旗、カトリックの信仰、伝統、歴史の旗であり、これを力強く示しさえすれば、オーストリア人の心に、その旗のもつ価値への愛着心をよびおこすことができた[11]」というのである。そして、はじめは革命に酔っていた者も、革命が過激になるに従い、心理的に、古い国家、古い信仰の側に身をよせ、農民も市民もプロレタリアの味方ではなくなり、このため、ヴィンディッシュグレーツやラデツキー、イエラチッチ等の血気にはやる軍隊がウィーンに入城してくるのを、秩序の回復として歓迎しているのである。[12] だから、「一八四八年革命が失敗に帰したのは、歴史的な国家像、歴史的な象徴、誇らしい思い出、伝統的な諸関係が、単にある一派が決議したくらいでは捨てさられるものでないという事実に直面したがためである[13]」とされる。

確かに Stadelmann は三月革命のナレーターである以上の仕事を残した。心理的考察から社会史をえがくことは、革命のような、激動の時期を対象にする際には、ことに欠かせないもののように思われる。私見をいえば、オーストリアを含めた三月革命の、広義の政治史が、戦前、Valentin によって完成されたとするならば、戦後の研究発達史は Stadelmann から出発したといっても過言でない。それ程、戦前の方法を断ち切ろうとした意味で、貴重である。それにもかかわらず、Stadelmann も無意識のうちに、ドイツ的思考法の伝統をうけついでいたのではないだろうか。彼がオーストリアの、またプロイセンの、あるいは全ドイツの三月革命の不成功を語る時、要約してしまえば、平均的大衆の間で、革命に対する嫌悪の心理が働き、その厚い壁の前に、革命意識の一般化が不能であったとするのであるが、その前提として、革命思想とかマルクス主義が西欧的思考であり、少くとも非ドイツ的思考とする考え方が存在している。従って、革命と反革命とに表現されるものは、最終的には、非ドイツ的なものとそれを心情的に拒否するドイツ的なもの Deutschtum——具体的な叙述の中では、それはしばしば、例えば、プロイセン的なものとか、ウィーン気質とかになるのであるが——の対立とされ、革命は「心理的」に、失敗すべくして失敗したという論理が運ばれている。断わるまでもなく、ドイツ的思考・文化を西欧的なそれや、時には多少の軽蔑をともないつつ、スラヴ的なそれと区別、対立させ、特殊化する例は Gierke, Treitschke, Troeltsch らの例をあげるまでもなく、ドイツ学界の伝統であったといってよい。Stadelmann もその枠をはみ出すことは、ついにできなかった。そのことは、彼の著書が心理学的社会史はえがきながら、社会経済史にはほど遠いものになったのと無関係ではないだろう。

〔註〕

① 経済史や労働運動史を直接のテーマとしている J. Kuczynski の諸著作等はもちろん、それ以外でも、例えば、K. Obermann, *Deutschland 1815–1849*, Berlin, 1963 等にも、その傾向を認めることができる。

② もっとも、経済史への関心が絶無でなかったのはいうまでもない。例えば、J. Deutsch, *Geschichte der Österreichischen Gewerkschaftsbewegung*, Wien, 1929.

③ 一例をあげれば、革命直前のウィーンで貼られた政府攻撃のビラや演説要旨が、くどいほど採録されている。

④ R. Endres, *Revolution in Österreich 1848*, Wien, 1947: Vorwort.

⑤ V. Valentin, *Geschichte der deutsche Revolution 1848–1849*, 2Bde, Berlin, 1930: Bd. I, Vorwort (S. VII).

⑤ *Ibid.* Bd. II, S. 589.

⑦ *Ibid.* Bd. II, S. 591–592.

⑧ R. Stadelmann, *Soziale und politische Geschichte der Revolution von 1848*, München, 1848, S. 48

⑨ *Ibid.* S. 16.
⑩ *Ibid.* S. 3.
⑪ *Ibid.* S. 4.
⑫ *Ibid.* S. 14.
⑬ *Ibid.* S. 5.

二　社会史の出現

一転して、アメリカを中心とする諸研究に眼を向けてみよう。アメリカでのオーストリア研究は第二次大戦後になって、急に活発になってきた。恐らく、第二次大戦中におこってきた関心が、戦後に開花したものと想像されるが、オーストリア三月革命についていえば、それまで、スタッフと史料の乏しさから手がつけられずにいたものが、歴史学界のレベル・アップによって、問題意識にのぼってきたことや、戦後、間もなくおとずれた、革命の一〇〇年記念に際し、共産党宣言、二月革命との関連において、一八四八年という年が注視せられるようになってきた一般的事情の他に、アメリカの世界政策との結びつきが背景にあったものと予想される。

いうまでもなく、第二次大戦後、アメリカはアメリカの世界指導の責任が、いよいよ重大になったと感じたが、その反面、世界情勢は一層複雑になってきた。ソ連との対立およびソ連勢力圏の拡大に対する防止、そしてそのためには、自由世界の政治的、経済的再建を援助しなければならず、自国の経済的繁栄は維持していかなければならなかった。つまり、戦勝と敗戦、経済的打撃の度あい、政治的安定度、社会的混乱のぐあい等、さまざまに異なり、時には対立する自由世界の諸国に対して、適切に援助しながら、これを統合し、強化することで、アメリカの世界指導を実践せざるをえなかった。[1] ここに、アメリカの一つの目は、かつて、言語、宗教、風俗、社会、経済発達の違う一〇以上の民族からなったハプスブルク複合民族帝国に向けられていったのである。アメリカは自らがおこなう世界政策の「歴史の実験室」をオーストリアに発見するにいたった。この理由によって、関心の多くは、国際政治の一環としての革命、比較革命史、民族問題、革命をおこすにいたる新しい社会勢力と理念、反革命の要因などに向けられている。

The Opening of An Era: 1848, London, 1948 は F. Fejtö が編集者となっているもので、*A Historical Symposium* の副題をもっている。内容的には各国の学者一六名がそれぞれの専門領域を地域別に分担し、オーストリア関係では R. Endres, A. Klima, M. Roller, F. Fejtö, B. Goriely らが受けもっている。[2] この書の特長は、全体の序文に当たる A. J. P. Taylor, *The*

Opening of An Era: 1848 と F. Fejtö, *Europe on the Eve of the Revolution* および Fejtö, *Conclusion* に代表せられる。それらの中で、生産様式が変わり、ヨーロッパでは農業から工業へと中心が移動し、交通・通信の発達にも助けられて、人口の移動が始まり、都市を中心にした文明の時代がおとずれたとしている。土地所有者を中核にした時代からブルジョアジーの時代となったばかりでなく、労働者が自己の権利を要求するようになってくる。真の意味で、一八四八年の道を用意した超人は、ヘラクレスよりも偉大な大衆 masses なのである。「一八四八年に始まった時代は大衆の時代である。すなわち、大量生産の、大量移民の、巨大な戦争の時代である。普遍的な幸福を追求して、あらゆるものが普遍的になった。普遍的な投票権、普遍的な教育、普遍的な兵役、ついには普遍的な破壊にまでいたるのがそれである。③」

ここで一貫して主張されているのは、一八四八年をもってする「新しい時代の開始」である。すこし大げさないい方をすれば、一八四八年をもって、生産様式、生活の方法、意識、社会構成が前の時代と一変してしまう、時代区分の年としているのである。後におこってくる、一八四八年の転換点論争は、この書の提起によって、本格的になってきたのであるが④、一八四八年を前記のようにとらえる限り、一つの革命は全ヨーロッパ的に連鎖、拡大するのが当然であり、一八四八年は「動乱の年」the year of revolts にならざるをえなかったのである。

しかし、この問題意識がある以上、それぞれの国家、民族、地域革命によっての、受態条件が、それぞれの社会の発展の程度に応じて異なってくることも確認しておく必要が生ずる。個別革命の具体的記述が、一九世紀中期のヨーロッパ社会の大転換という全体のテーマにそうように努力を傾けながら、本書が、スカンディナヴィアやヘレニズム問題までも含めた比較社会史ないし比較革命史の構成をとっている意味がそこにある。ハプスブルク帝国関係についていえば、Endres は革命直前のウィーンに関して、資本主義の発達によって、低賃金、長時間労働に悩まされるプロレタリアート、機械の増加で生活を破壊され、適切な救済手段を構じない政府に怒る低中産者、国家が資本主義の発展に対応できるように改革されないのにいらだたしさを感ずる中産上級者、農民の反抗を改革を通じて予防しようと計る自由主義貴族、宮廷内の反メッテルニヒ勢力をあげ、それらが独自の要求をもちながら、「一つの目的で共通していた。それは宰相メッテルニヒの解任である⑤」とのべ、さらに革命勢力と反革命勢力の対立を説く。そして、革命と改革の間をすり抜けた反革命勢力は、一八五〇年になれば、自己の強さを再認識し、「官僚はもはや選挙された議会の

コントロールを恐れないようになっていたし、行政は一八四八年三月以前の悪い方法にもどっていた。民族の問題は未解決で、帝国は時間とともに、変革の最後の機会を失った」[6]と決論している。Endres の論文はメッテルニヒ時代に訣別しようとした社会勢力の結集で三月革命が始まりながら、革命の進行過程において、利害の対立がその結束をみだし、反革命勢力が再編される革命社会史のオーストリア・パターンをとり上げながら、どのような経済成長の中で、階級の分離・対立が生みだされたかをのべず、ただ、反メッテルニヒ陣営に、多様な階級が存在していたことから出発しているのがもの足りなさを感じさせる。

これに対して、ボヘミアを扱った A. Klima は経済史の専門家らしく、Social and Economic Conditions から書きはじめ、マリア・テレジア以来のマニュファクチュアが一九世紀前半に、急速に工業化していったことが、労働者を中心にした聖ヴェンツェラス広場の集会と一二項目の要求につらなり、工業化を背景にした民族的な力が、ドイツ人との対等、農民の解放などを内容とする四月宣言となったばかりでなく、スラヴ大会で主導権をにぎることになるのであるが、反面では、このような動きが労働者と市民を分裂させたとしている。Fejtö はハンガリーの叙述において、巨大な土地を有したマグナート貴族が政府高官と上院を独占し、コシュートやデアークをリーダーとして、本質的には保守的であるが、その一部には、基本的な改革を希望するものがいた小貴族と対立し、全体としては、賦役制を残す、封建的なハンガリーをえがき、その構造がナショナリズムや自由主義の展開に際して、多様な対応をみせ、改革か革命か、また、自治か独立かという基本問題で、複雑に結合したり、分離したりしながら、独立革命に敗退する姿を説明している。

以上の如く、ルーマニアやポーランドの一部も加え、ハプスブルク帝国での一八四八年革命を、ある程度、社会構成史的に考察している点で、画期的な側面をもっているのであるが、地域別の叙述であるので、オーストリア帝国の全体像として、一体どのようであったのかという点では極めて不十分にならざるをえなかったのである。

アメリカで出版された、おそらく最初のオーストリア革命史は R. J. Rath, *The Viennese Revolution of 1848*, Univ. of Texas Press, 1957 であろう。四〇〇ページをこえる著述の中で、まず、革命以前の帝国の状況が、中央政府と地方とのスムーズさを欠く交流、硬直化した非能率な政治、財政権、物価と収入の不均衡等の病状におちいっていることを、具体的にのべ、「オーストリア帝国の暴動は、比較的大きな中産階級の革命運動の一つであった」[7]

と規定し、この立場をモチーフにしている。従って、死の病いの床についている絶対主義＝メッテルニヒ政府対自由主義的な中産階級が革命の主軸とされ、実際に革命を推進した学生や農民、労働者は、デマゴーグにおどらされた茶番劇の役者とされてしまっている。[8] 著者には多くの史料、文献を読破した形跡がみえ、叙述は紙芝居でもみるように詳細で、かつ具体的である上に、巻末の文献目録や重要人物の解説は便利さを提供してくれるのであるが、中産階級のイデオロギーからだけ革命を分析している点、あまりにも説明的な叙述、および、ほとんどウィーンのみに限定されている点等の欠点が目だつのである。

この点、A. G. Haas, *Metternich, Reorganisation and Nationality*, New York, 1963 や P. Robertson, *Revolution of 1848*, New York, 1952 の方が問題意識と方法論が確立されている。前者は Srbik のメッテルニヒ解釈にそった革命前史の研究であり、後者は副題を *A Social History* として、フランス、ドイツ、イタリアの革命とともにオーストリア革命をとりあげているのであって、両者とも、オーストリア三月革命の専門書ではない。しかし、前者は、ウィーン体制をつくりあげ、国家のバランスによって、ヨーロッパの秩序を回復した「ヨーロッパの宰相、メッテルニヒ」が、オーストリア国内政治においても、民族のバランスによって、国家の再建と維持をなしとげた点を強調するもので、ともすれば分解しそうになる複合民族国家を、民族の力を弱めることなく統合した事実を、積極的に肯定している。この延長線上から、革命の対象者、反革命と悪の代名詞メッテルニヒを設定することで説かれてきたオーストリア革命の多くの構想とは違った考え方が出てきそうである。後者は Start of a hundred year cycle, いいかえれば、社会的意味での現代史の開始の時期として一八四八年をとらえる。断わるまでもなく The Opening of An Era が提起した線にそうものであるが、それがあまり多くの国、地域を分担して扱ったために生じた欠点に対し、一人の著者が、四つの国に限定しているので、量的にも集中でき、散漫さを免がれている。オーストリアについては、「手におえない、反動性はしばしば中国に比較された」し、「多くの人種、階級、民族[9]」をもっていたとして、ドイツ人対マジャール人、マジャール人対スラヴ人の政治的関係は革命政府の処理しうるものではなかったと断定している。両書とも、代現アメリカの政治的関心が反映しているといえる。

なお、オーストリア史の中で、比較的、三月革命に分量をさいているものには A. J. P. Taylor, *The Habsburg Monarchy*, London, 1948 と H. Kohn, *The Habsburg Empire 1804-1918*.

Princeton, 1961 などがあり、R. A. Kann, *The Multinational Empire*, 2 Vols., New York, 1950 は革命以後の民族問題を詳細に扱っている。⑩

〔註〕

① 例えばトルーマン大統領は一九四七年三月二一日の、いわゆる「トルーマン・ドクトリン」を発表した演説の中で、「アメリカ合衆国外交政策の基本的目的の一つは、われわれおよび他の国民が強制から自由に生きてゆく諸条件を創造するにある。……われわれが自由な諸国民をよろこんで助け、全体主義的政権をおしつけようとする侵略の動きに敵対し、彼らにその自由な制度と国家保全を維持させなければ、われわれの目的を実現することはできないであろう」と、世界政治のリーダーシップを強調している。

② 詳細にのべれば、Endres, *Austria in 1848*. Klima, *The Revolution of 1848 in Bohemia*. Roller, *Rumanians in 1848*. Fejtö, *Hungary: The War of Independence*. Gariely, *Poland in 1848* であり、参考までに、他の題目を列記すれば、*The Transformation of Switzerland, France and the Revolution of 1848; Italy in 1848; Spain in 1848; Belgium in 1848; The Events of 1848 in Scandinavia, Great Britain and the Revolution of 1848; America and the Revolutions of the Middle of the Last Century; An Historical Poradox: The Revolution of 1848 in Germany, Hellenism and 1848; The Russia of Nicholas I in 1848* と多彩である。

③ *The Opening of An Era*, London, 1948. p. XXV.

④ この問題で便利なのは M. Kranzberg, *1848, A Turning Point*, Boston, 1965 である。

⑤ *The Opening of An Era*, p. 253.

⑥ *Ibid.* p. 280.

⑦ R. J. Rath, *The Viennese Revolution of 1848*, Univ. of Texas Press, 1957. p. 3.

⑧ 同書の中で、「無言の大衆は革命が天からの食物をもたらすもののように信じていたし、革命前と同じように空腹であわれでおらねばならぬのが判ると拒否的になった。……ついに反革命が革命運動を鎮圧させるのに成功した時、反革命派は大ていの土地で熱狂的に歓迎された」とのべている。

⑨ P. Robertson, *Revolution of 1848*, New York, 1952. p. 189.

⑩ なお、Valentin の「ドイツ三月革命史」が英訳されている。1848, *Chapters of German History*, Translated by E. T. Scheffauer, London, 1940. この英訳は二巻一四〇〇ページ以上の原書を四八〇ページの一巻本にした要約であるが、重要個所をのがしていない、要領のよいものである。

三　社会経済史への接近

これまでに述べてきたところから判明するように、オーストリア革命の研究においては、経済史的なそれは貧困で、革命史の一分野として確立されていない。メッテルニヒ研究やドイツ統一問題で古くから尨大な著述を発表してきた H. R. von Srbik にしても、革命そのものは手がけていないし、著述の中で、革命にふれる場合でも、極めて政治史、あるいは理念史として扱っている。①

また、独自のテーマをとりあげる E. Winter にしても、経済史への関心は示しながら、あくまでも思想史的政治史の域をでていない。[2] むしろ、外国の研究者が三月前期における、経済的側面よりする社会史を提案しているのが大勢である。

第二次大戦後の間もなく、プリンストン大学の J. Blum は、三月前期の農業について、貴重な業績を発表した。[3] 彼はオーストリアが全体として、農業国家であり、土地所有者である貴族が封建的特権の上に立ち、政治的発言力においても抜くべからざるものをもっていたのを認めながら、北西部、低オーストリア、ドイツ・スラヴ地区、ハンガリーなどの地域によって、かなり事情が違っていたとしている。そして、人口の、特に都市人口の増加、輸送手段の改善、大工場制工業の出現と並んで、農業の革命が三月前期にみられたのを強調し、[4] それへの対応が地域によって、大きく異なっているとするのである。

封建的な手段によっては、生産力を向上させることが不可能であり、自分たちの利益にもならないと判断した地主たちは、三月前期に、思い切った方向転換に出た。著者が Conclusion でまとめているのは、㈠、一八一五年から四八年にかけて、貴族的土地所有者の間にひろがった資本主義的農業生産への新しい関心、㈡、この時期を通じて、貴族、土地所有者が農業改革の指導的擁護者であったこと、㈢、農業改革を擁護する貴族的地主の第一の理由は経済的理由にあった、㈣、農業改革を提唱していた貴族的土地所有者によって、一八四八年の解放法が実現された、である。[5]

著者は、三月前期を通じてみられた農業改革と三月革命との因果関係を論じているのではない。また、三月革命までに、農業改革が完成されたのではなく、それがこの時期に開始されたものであるにすぎないとしている。要するに、貴族的土地所有者がなした、三月革命以前の改革が、資本主義的利潤の追求を目的にしていた点を明らかにしたにとどまるのであって、資本主義と市民革命というテーマと、正面からとり組んだものではない。本書を批判する立場に立てば、あまりにも貴族的土地所有者に好意的でありすぎ、改革を進めた貴族を、彼のいうように、全オーストリアに一般化してよいかどうかの疑点が残る。もし、それほど改革に熱心であったならば、革命に農民が参加したのを、どのように説明しようとするのか。農民は改革をどう受けとめていたのか、また、彼のいう改革が、農業技術に重点がおかれていることなどにも不満があり、彼が企図した『一八四八年の農民解放の起源の研究』は、必ずしも、果たされているとはいえない。それにもかかわらず、著者は明らかに、未開のオーストリア経済史を開拓しようとしている。[6] 将来、こうした基礎研究が重ねられて、革命史の

掘りさげが進められる第一歩を印したといえるのである。

今世紀の五〇年代の終りから六〇年代のはじめにかけて、注目を要するいくつかの著作が発表された。

㈠ *Aus 500 Jahren deutsch-tschechoslowakischer Geschichte* (herausgegeb. von K. Obermann u. J. Polišenský), Berlin, 1958.

㈡ *Probleme der Ökonomie und Politik in den Beziehungen zwischen Ost-und Westeuropa vom 17. Jahrhundert bis zur Gegenwart* (herausgegeb. von K. Obermann) Berlin, 1960.

㈢ *Studien zur Geschichte der Österreichisch-Ungarischen Monarchie* (*Studia Historica*, 51, Redigiert von V. Sándor u. P. Hanák), Budapest, 1961.

㈣ R. A. Kann, *Das Nationalitätenproblem der Habsburgermonarchie*, 2Bde., Graz, 1964.

などが主なものである。

形式から分ければ、最後のものを除いては論文集で、一九世紀から二〇世紀初頭にかけての、さまざまな問題を、マルクス主義によって解明しているものであり、㈣はニュー・ジャージー州立大学教授、コロンビア大学客員教授で、アメリカのオーストリア、中欧史の権威者である Kann が、*Werden und Zerfall des Habsburgerreiches*, Graz, 1962 や Kanzel und Kathedar, *Studien zur österreichischen Geistesgeschichte vom Spätbarock zur Frühromantik*, Wien, 1963 につづいて出版したもので、Bd. I は Das Reich u. die Völker とされ、Bd. II は Ideen u. Pläne zur Reichsreform となっている。

㈠～㈢の論文の中には、三月革命期研究にとって、興味あるものが多い。㈠の J. Purš, *Einige theoretische Probleme der industriellen Revolution* や A. Klima, *Zur Frage des Übergangs vom Feudalismus zum Kapitalismus in der Industrieproduktion in Mitteleuropa* さらに、㈢に含まれている A. Klima, *Ein Beitrag zur Agrarfrage in der Revolution von 1848 in Böhmen*, W. Brassloff, *Zum Problem des Übergang von Feudalismus zum Kapitalismus in Österreich* (Diskussionsbeiträge), J. Buszko, *Beiträge zur wirtschaftlichen Entwicklung Galiziens in den Jahren 1848–1867* といったものは、オーストリア全域、もしくは地域別の、封建制から資本制への理論的整理をおこなっているもので、例えば Purš は世界的な産業革命との関連において、ボヘミアの産業革命をとらえているなど、基本的な問題提起を含んでいるが、理論的にすぎて具体性に欠けるうらみがあり、その理論も公式論に傾いている。私にはむし

ろ、一例をあげるなら、(一)の V. Vomáčková, *Die Bourgeoisie in Böhmen und der deutsche Zollverein im Jahre 1848* のように、個別的な特殊問題を、マルクス主義に立ちながら、史料を通じて、一八四八年のオーストリアを解明しようとしている論文——前記の論文集には、そうした特殊研究の方が多いのであるが——の方に好意がもたれた。Vomáčková は、人口の点では少数であったボヘミアのドイツ人が、大工業と経済の支配権をにぎり、中小企業以下がチェッヒ人のものであった。しかも、チェッヒ人の間でも利害が一致しなかったから、「チェッヒ・ブルジョアジーは政治的、経済的な方向づけではスラヴ人に組して、フランクフルトに対する防衛を求め」[7]ていたが、プロイセンを中核にするドイツ関税同盟への加入のような、切実な問題に直面すると、多数の異なった立場が生まれてきた。しかし、結局、ドイツの工業力に対抗できないと判断するチェッヒ・ブルジョアジーの意志が大勢を制し、オーストリア＝ドナウ流域を市場とする——その範囲では、すぐれた工業力をもつ——一種の孤立主義が打ちだされ、それが革命に対するチェッヒ民族主義を展開される基調になったと説くもので、いわゆるオーストリア・スラヴ主義の社会経済史的説明を、事実に即しておこなっている[8]。

オーストリア三月革命を社会経済史の理論から説明するには、大雑把な方程式からするだけでは、啓蒙的意義以上に求められない。事実について、「何故か」に答えられるものでなければならない。Vomáčková がボヘミアに限定された、すぐれて政治的なナショナリズム運動を説明する一つの材料を提供してくれた意義は高く評価されてよい。同様な意味で、J. Marx, *Die Wirtschaftlichen Ursachen der Revolution von 1848 in Österreich*, Graz, 1965 も注目される。本書は *Veröffentlichungen der Kommission für Neuere Geschichte Österreichs*[9] の Bd. 51 として公刊されている。著者は三月前期のオーストリアを、ツンフトと機械工業の対立の時代[10]として、基本的にとらえる。一九世紀はじめの対ナポレオン戦争、大陸封鎖は従来ツンフト制のもとにあったオーストリアに、大きな変化をもたらした。対仏戦争はフランスから輸入されていた絹織物を中断させ、それによって、ウィーンの絹織物、メーレンの布地工業がおこり、繊維工業における、従前からの生産方式と抗争するようになった。大陸封鎖は自立主義をうながし、政策的にも、資本主義工業が奨励されたのであるが、戦争の終了と大陸封鎖の解除は、一瞬のうちに好景気と投機熱をうばってしまった。もともと、一九世紀前半に、ツンフトと機械工業が対立し、農民に封建地代が残存しているのは、経済的な後進性と弱さを物語るものである。それ故、大陸封鎖が解除されると、たちま

ち打撃を被る。先進工業国の前に、その弱体制をさらけだし、一八一一年には、早くも財政危機がおとずれてくる。北イタリアも含めた保護政策が採用され、ガラス、製鉄、織物工業では、技術の革新、集中化がなされて対抗するが、不況は免がれず、それが失業者の増加、移住民の増大、密輸、貧困化等の社会的不満をつのり、工業化に逆行する機械導入制止の動きにまで発展した。国内市場の拡大でこの危機をのり切ろうとしたにもかかわらず、輸送力の貧弱さと国民経済レベルの低さはこれも許さず、各企業は自己救済を強いられ、一八二六年にできた、ライバッハの家具製造組合を先頭に、企業組合が結成され、政府への信頼は低下していった。しかも、その一面では、工業の成立で「工業と農業の地域が明確に分かれ」[11]、ウィーンをはじめ、都市に人口が流入し、都市の物価をつり上げる悪循環がみられた。要するに、高税、失業、低賃金、物価高が、一八四〇～四四年の短い期間をのぞいては、市民の生活環境を破壊し、いらいらした気分にさせた。一八四五～四七年の凶作は、この悪循環を決定的にした。[12] これらが革命をおこさせ、拡大させた原因であるとしているのであるが、著者の主張でとくに目につくところは、東方問題での国際紛争やドイツ関税問題を重視していることであろう。ここでいう東方危機Orientkriseとは、一八三九年、エジプトのメヘメット・アリがエジプト、シリアのトルコからの独立と彼の世襲権を要求して戦闘を開始したのに始まるものである。この紛争は、周知のように、イギリスとフランスの植民地支配にからまる対立、パーマーストンによるイギリス、ロシア、プロイセン、オーストリアのロンドン会議、四国同盟の成立へと進み、フランスを背後にもつエジプトとロシアをたのむトルコの対立へと発展していった。フランスは派兵してライン国境をかため、それがドイツを刺激して、戦争の危険が近づいた。この事態がオーストリア経済に打撃を与える。最初はエジプト貿易の基地トリエステで始まった打撃は、[13] やがて全オーストリアに及び、[14] 商業から工業へと被害は広まって、失業者を増大させるのである。

関税同盟の場合は、四〇年代のはじめ、ドイツ関税同盟に結びつこうとする動きがではじめるが、結局、いわゆるSchutzvereinにふみきる。このことは、ドイツ市場を捨てて、国内市場のみに孤立させることになり、不況の乗りきりをますます困難にさせた。

いずれの場合をとっても、オーストリア経済が外国への依存度の高いものであったこと、従って、国外の情勢によって、大きな痛手をうけざるをえなかったことを示すと同時に、資本主義の脆弱な体質が、先進国との接触ごとに露呈したものといえる。この側面からは、むしろ革命が失敗に終る事実につながる因果関係が

発見されうるであろう。

概観してきた如く、政治史、理念史にはじまったオーストリア革命の研究は、遅まきながら、それらとは別の方向が出はじめている。われわれは、それをどのように受けとめ、政治史と関係づけるべきなのであろうか。

〔註〕

① Srbik には、もともと、プロイセン学派に対抗する立場がある。このため、例えば *Deutsche Einheit*, 2Bde., München, 1935 においても War Österreich geistiges Ausland? (Bd. I, S. 284ff) と問いかけ、オーストリアのドイツにおける正統性を主張している。従って、理念史に傾かざるをえない。彼の *Metternich, der Staatsmann u. der Mensch*, 3Bde., Wien, 1925–54 は、すぐれたメッテルニヒ伝であるとともに、三月前期の研究書ともいえるが、前記のオーストリアを正統とする立場とメッテルニヒに好意的な立場が重なり、オーストリア革命の性格を述べても (Bd. II, S. 247ff)、それがウィーン体制政策の無理解からおこったと説かれる。

② Winter の *Der Josefinismus*, Berlin, 1962 や *Frühliberalismus in der Donaumonarchie*, Berlin, 1968 はある観点からする、すぐれた三月革命研究であり、Frühliberalism では、各章のはじめに、ほとんど社会、経済を扱った節をかかげている。しかし、Winter はカソリック理念史の研究家であることから免がれない。

③ J. Blum, *Noble Landowners and Agriculture in Austria, 1815–1848*, Baltimore, 1948.

④ *Ibid.* p. 41.

⑤ *Ibid.* p. 234.

⑥ *Ibid.* p. 7 (Preface).

⑦ K. Obermann u. J. Polišensky (herausgegeben), *Aus 500 Jahren deutsch-tschechoslowakischer Geschichte*, Berlin, 1958, S. 234.

⑧ なお、ドイツ関税同盟とボヘミアの立場に関しては拙稿『ベーメンとドイツ関税同盟』(西山学報第一四号、一九六一) を参照。

⑨ この叢書は現在も新しい公刊を続行し、史料の公開を中心に、主として、政治史の開拓を進めている。

⑩ J. Marx, *Die Wirtschaftlichen Ursachen der Revolution von 1848 in Österreich*, Graz, 1965. S. 9.

⑪ *Ibid.* S. 18.

⑫ 食料品の価上りが、特にひどかった。一八四〇年から四三年にかけて、五・五クローネから六クローネで買えた牛肉と同量のものが、四四～四五年には、早くも七クローネになっている (ibid. S. 138)。

⑬ このため、信用が失われ、一八三九年八月には、トリエステの手形割引率が平均八%にものぼった。

⑭ 大商人にも影響が及び、一八三九年一〇月には、シュヴァイクホーファー貿易商事が、六〇万金フローリンの負債を残して倒産したのをはじめとして、破産会社が続出した。

四　展　望

オーストリアの革命は、事実上、一八四八年三月三日、プレスブルク議会でのコシュートの演説をもって開始されたといってよい。革命の序幕を飾り、もっとも激しい独立戦争をつづけたマジャールの革命はきわめて特殊な性格をもっている。もっとも農業

的であり、マグナート貴族の支配力が強く、スラヴ系農民がその下に存在していたのがハンガリーであった。[1] コシュートを指導者とする独立戦争は、ハプスブルク政策に接近しながら、ハンガリーの封建的支配を維持しているマグナート大貴族に対する小貴族の反抗という側面をもっていた。しかも、それと同時に、スラヴ系農民の抬頭を抑える意味をも含んでいる。[2] 独立戦争が進行する中で、みずからも農業労働者となって働かなければならないほどの貧困貴族の出身で、兵士の間に人気のあったヘルゲイの抬頭やイェラチチに率いられたクロアート軍が、ハンガリー軍に大きな打撃を与えたことなどは、この性格から出てくるものであった。[3]

ウィーンの革命は労働者、学生から始まり、生活感覚から反政府的になっていた市民をまきこみ、メッテルニヒ内閣の退陣を迫ることで開幕した。無論、市民革命を推進した急進派は存在したが、それは少数派であるにすぎない。事実、さしあたっては、メッテルニヒの退陣に歓呼の声をあげたのであるが、それに代って登場するのは、チェッヒの封建貴族の出身で、フランツ皇帝に仕え、財政官として親任の厚かったコロウラートである。[4] 貴族的、官僚的という点では、メッテルニヒとの交代はほとんど意味がない。暴動が政界の勢力争いに利用され、内閣が交代しただけとも極言できるようなウィーン三月革命は、一時的な興奮からさめれば、反革命に傾き、その後に、絶対主義の再編成がみられるのである。[5]

ボヘミアの場合は、ほぼ四分の一にあたるドイツ人が経済社会の上層部を占めていたとはいえ、オーストリアの中でもっとも工業地帯であり、市民層が発達していた。これがパラツキーの行動に代表されるように、他国との競争をできるだけ避けながら、オーストリアを維持して、その中で、チェッヒ人の強い自治を要求して優越を保持する態度となってくる。[6]

その他のセルブ、クロアート、ルーマニア、ポーランドなどの民族も、それぞれの立場と問題をかかえていた。これらの諸民族を統合して統治していくのが、マリア・テレジア以来とられていた伝統的政策なのであるが、それは民族間のバランスをとるのを主軸としながら、その反面では、民族間の不均等な発展を前提とするものであった。それ故に、一八四八年に、オーストリアの各地でおこる革命運動は同質でない。素朴に、封建制、あるいは絶対主義に対する闘争と整理してしまえば一致点を発見できるであろうが、既存の体制として存在している封建制、絶対主義とそれに対立し、革命を進める担い手、および両者間の緊張関係は、地域と民族によって、大きな開きをもっていて、決して均一化されたものではない。いいかえれば、オーストリア革命は単一の革命

ではなくして、複合の革命であった。

従来、これを民族の政治と理念の問題にして追及してきた。時には文化、精神の問題とされてきた。しかし、各民族が自己の歴史の古さ、文化の優秀性、民族精神を誇り、競いあう意味での民族問題こそは、まさに、オーストリアの民族政策と同一の発想法に他ならない。不均等に発展した諸地域を内包しているオーストリアの経済史が、容易に発達しなかったのは、ある意味では当然であったかもしれない。その綜合把握は、極めて困難で、強いて企図すれば、並列的叙述に終わるおそれが十分にある。

異った社会の上に、複数の革命がみられたのを、オーストリアの一八四八年革命だとする前提に立てば、さしあたり、民族問題にもどらざるをえないであろう。ただし、その場合には、民族の動きや発想法をより合理的に説明しうる論理が必要で、比較的末発達な経済史を固めることが求められる。それは必ずしも、純粋な経済史をさすのではなく、一つ一つのテーマについて、十分に説明的になりうる裏づけとしてである。ただ、オーストリアでは、それを他地域、他民族との比較を念頭において進めることが不可欠である。オーストリア革命は民族対立の複雑な経過を含んでおり、対立する民族の状況を概括的にでも、把握しておく必要がある。

時期別にいえば、オーストリア絶対主義を解明することが、今後の急務のように思われる。オーストリア絶対主義は特殊なものであり、国民国家のそれとは性格が違っている。三月前期が絶対主義の末期に位置するものだとすれば、その本質、構造、政策等を究明しておかなければ、市民革命としての三月革命の研究は不可能であろう。この点が、これまで、もっとも成果をみなかった分野である。絶対主義としての三月前期が、構造的に明らかにされるようになった時、各地域の社会経済的事情とウィーンの政策とを結ぶ意味がより明確になる時であろう。

ハプスブルク帝国は、歴史のパースペクティヴの中でとらえる時、一六、一七世紀を頂点として、指導的国家の列からはなれ、地方的な国家に墜ちていった。⑦ monarchia uivasal からの転落を、いかにくい止めるか、というのが、歴代皇帝のもっとも苦心したところである。オーストリア絶対主義は、この苦肉の策として生まれ、革命は絶対主義に敗れはしたが、革命がおこったことで、帝国の没落は一そう早まり、別の形の絶対主義を誕生させている。強力な新興国家プロイセンと次第に巨大な姿をのぞかせて、ヨーロッパに介入してくるロシアとの間にはさまれたオーストリアを、国際関係の上から整理し、その意識の上から、三月革命を考え直すことも、今後、必要になってくるであろう。

オーストリア三月革命は複雑である上に、例えば、イギリス革命史やフランス革命史の研究が、絶対主義の成立から、革命の成果にいたるまで、多彩で豊富な発達をとげているのに比べれば、決して高い水準にあるとはいえない。今後の、より多角的で、巾広い研究が実ることを希望するものである。

〔註〕

① ハンガリーでは、一八四六年当時、人口の約九〇%が、林業を含めた農業に従事しており、ボヘミアの六七%に比べて、断然高く、オーストリアの全平均が約七五%であるのと比しても、農業的性格が指摘できる（J. Blum, *Noble Landowners*, p. 43, H. Hantsch, *Geschichte Osterreich*, Wien, 1953: Bd. II, S. 338）。そして、一般の貴族と区別される「王国の仲間」であるマグナート貴族が、土地所有においても、政治発言力においても、圧倒的な強さをもち、クロアート、スロヴァーク、セルビア等からの移民を労働力として使用していたが、それには賦役を伴う。これらの数は、ハンガリーの人口が約一一五〇万人に対して、五五〇万人にのぼる。

② 一八四八年三月一五日、ブダペストのラーコシ広場に市民、学生、農民が集まり、封建制の廃止、平等な課税等を要求した。これら要求項目の中にはスラヴ農民の反マジャール化とみなされるものがあったが、コシュートやデアークは、これを無視している。

③ この点については、拙稿「コシュートとハンガリー革命」（史泉、第二九号、昭三二）を参照されたい。なお、G. E. Rothenberg, *The Military Border in Croatia, 1740–1881*, Chicago, 1966 はクロアチア軍のみならず、マジャール人とクロアチア人の関係史としても秀れている。

④ V. Valentin, *Geschichte der deutsdhe Revoution*, Bd. I, S. 19–20 なお、コロウラートはメッテルニヒの長い間にわたる政治上の宿敵である（Srbik, *Metternich*, Bd. I, S. 540ff）。

⑤ R. Kann, *Nationalitätenproblem*, Bd. I, S. 87ff.

⑥ パラッキーも、はじめ、反貴族、反封建闘争を打ち出し、小市民的急進主義が独立革命に走ると、貴族と妥協するのである。

⑦ H. G.Koenigsberger, *The Habsburgs and Europe*, Cornell Univ. Press, 1971: Preface.

（大阪外国語大学教授・　　）